

English Academic Writing for University Students

英語アカデミック・ライティングの基礎

一橋大学英語科 [編著]

研究社



In Your
Own Words

Excerpt from THE FEELING OF WHAT HAPPENS: BODY AND EMOTION IN
THE MAKING OF CONSCIOUSNESS by Antonio Damasio.

Copyright © 1999 by Antonio Damasio.

Reprinted by permission of Houghton Mifflin Harcourt Publishing Company.

All rights reserved.

Excerpt from HARUKI MURAKAMI INTERVIEW by Laura Miller and Don George.

This article first appeared in Salon.com, at <http://www.Salon.com>.

An online version remains in the Salon archives.

Reprinted with permission.

Excerpt from TRIAL BY JURY IN JAPAN: HANGING IN THE BALANCE

Copyright © The Economist Newspaper Limited 2015.

All rights reserved.

まえがき

本書は、一橋大学における一年生向けの必修英語科目で使用される、ライティングのためのガイドブック・教科書として編纂されました。

昨今の日本の英語教育に関しては、「コミュニケーション」の重要性が盛んに強調されています。その場合に「コミュニケーション」という言葉が指すのは、なぜか「オーラル・コミュニケーション」のこのようです。従来的には、日本の英語教育においては口頭のコミュニケーション技術の訓練の比重が低かったのは確かで、近年の取り組みによって、大学に入学する学生たちの聞き取り能力や口頭による発信の能力が相対的に高まってきたことは、英語教授の現場にいる本書の執筆・編集者たちも実感しているところです。

しかしその一方で、「コミュニケーション」のより広い意味、本来の意味が忘れられようとしているという危惧もあります。つまり、読むことや書くことは「コミュニケーション」とは見なされなくなり、下手をすると読み書きの能力と聞き話す能力とは無関係のものに見なされ、それどころか読むことと書くことを教えるのは害悪でさえあるというような転倒した風潮が生まれつつあるように感じられるのです。

実際、大学に入学してくる学生たちの文法能力や語彙力は、目に見えて低下してきています。これはおそらく、「口頭で発信をするためには文法の正確さは犠牲にし、語彙もできるだけ簡単なものに制限をした方がよい」という、ある意味では理解のできる事情によるものではないでしょうか。その結果、授業のレポートなどで英語を書く際にも、動詞の一致や時制の選択もままならず、また語彙も稚拙なものを繰り返し使うような傾向が見られるようになりました。

一橋大学英語科では、聞くこと・話すことと同様に読むこと・書くことも「コミュニケーション」の重要な一部であると考え、またさらには読み書き能力を高めることが聞き・話す能力の基礎となるという、当然とも思えるけれども忘れ去られつつある原理を再確認しながら、英語カリキュラムを展開しています。

本書はそのような理念に基づくカリキュラムの中で、「書くこと」一般ではなく、大学における「アカデミック・ライティング」の基礎を教授する際のガイドブックとして編纂されたものです。詳しくはこのあとの「1.0 アカデミック・ライティングの文化」に譲りますが、アカデミック・ライティングの基本を学

ぶことは、書くことによって何かを伝達・主張することの基礎として非常に重要であるとはいえ、その基本は高校までの英語教育においては教えられておらず、大学の基本カリキュラムに組み込む必要があります。

本書の原型となったのは、2011年に一橋大学英語科が非売品のかたちで発行し、それ以来授業で使用してきた『In Your Own Words 英語アカデミック・ライティングの基礎』です。この教科書を授業で使ってきた経験から、このような内容のガイドブックは広く他大学においても英語ライティング教育でのニーズがあるだろうと考え、一橋大学のみで通用する内容を削除し、サンプル文の差し替え・追加などの再編集をしました。

原型となった教科書の大部分は、一橋大学の川本玲子が執筆しました。再編集にあたっては同じく一橋大学の河野真太郎、越智博美、Christopher Sullivan, Greg Dvorak が中心となって作業を行い、最終的には一橋大学英語科の教員全員によって校閲作業を行いました。

目次

まえがき iii

1.0	アカデミック・ライティングの文化	1
------------	-------------------------	----------

1.1	リサーチ・ペーパー作成の流れ	6
1.2	トピックの選び方	7
1.3	トピック選択シートを使って、トピックを決める	8
1.4	トピック選択シート	11

2.0	リサーチを始めるにあたって	15
------------	----------------------	-----------

2.1	インターネットでリサーチする	17
2.1.1	検索に便利なサイト	18
2.2	大学図書館を利用する	19
2.2.1	本と雑誌での論文の探し方	19
2.2.2	検索のコツ	21
2.2.3	所属大学の図書館に資料がない場合	22

3.0	リサーチ・ペーパーの構成	23
------------	---------------------	-----------

3.1	主題文 (Thesis Statement) とアウトライン	26
3.1.1	主題文を書く	26
3.1.2	アウトラインを作る	27
3.2	サンプル・アウトライン	28

4.0	原稿を書く	30
------------	--------------	-----------

4.1	本論を書く	31
4.1.1	パラグラフ・ライティングとは	31
4.2	論旨の展開を分かりやすくするために	32
4.2.1	論の順序やつながりを示す表現	33
4.2.2	論文中で避けるべき表現	34

4.3	序論・結論を書く	34
4.3.1	序論	34
4.3.2	結論	35
4.4	文章サンプル	36
4.4.1	短めの学術論文 (The Academic Essay)	36
4.4.2	その他のスタイル	42

5.0	論文の体裁を整える	47
5.1	論文タイトルについて	47
5.2	書式サンプル	49
5.3	書式設定について	50
5.4	イタリックと引用符の使い方	52

6.0	さまざまな引用の仕方を学ぶ——剽窃を避けるために	54
6.1	直接引用と間接引用	54
6.2	引用時によく使う動詞や表現	55
6.3	直接引用のパターン	57
6.3.1	短い引用	58
6.3.2	長い引用	59
6.4	間接引用——パラフレーズとサマリー	61
6.4.1	パラフレーズ	61
6.4.2	サマリー	64
6.5	文章中の引用文献の示し方	65
6.6	引用文献 (Works Cited) リストの作り方	67

Appendix 1	サンプル論文 (一部) & 参考文献リスト	71
Appendix 2	APA 方式・シカゴ方式による引用文献の示し方の例	80

参考文献	84
------	----

1.0 アカデミック・ライティングの文化

英語の論文(リサーチ・ペーパー)と小論文の違い

みなさんは高校や大学を受験するにあたって、国語の小論文というものを書いたことがあるでしょう。与えられたトピックについて数百字程度で筋道立った意見を述べる、という論述です。たとえば最近では、ITとグローバル化、環境と資源、子供の教育その他が「定番」テーマだそうですが、『小論文必勝マニュアル』のようなタイトルの本を読んで、出題されそうなトピックについての模範的な文章をほぼ丸覚えしたという人もいるかもしれません。

さて、大学で英語の「リサーチ・ペーパー」(研究論文)というものを書くという課題を与えられたとき、まずみなさんの頭に浮かぶイメージは、「ちょっと長めの小論文の英語版」ではないでしょうか。確かに、ある一つの主題について明確な、一貫した意見を筋道を立てて述べるという点では、小論文もリサーチ・ペーパーも同じです。

しかし、いくつか重要な違いがあります。まず、高校や大学入試の日本語小論文では、テーマはたいていその場で与えられるので、自分の頭で考えたことを書くのが前提となり、他者の意見を紹介したり、議論したりすることは、特に求められていません。むしろ、自分がすでに持っている知識と見解を分かりやすく、適切な文体で書けるかどうかの評価の対象になります。

一方、英語のリサーチ・ペーパーでは、そもそもトピックを自分で決める場合も少なくありません。(もちろん、何でもいいというのではなく、テーマについてはある程度の指示があるはずですが。)また、トピックを自分で選ぶ、選ばないに関わらず、それについて相当量の研究・調査をあらかじめ行うことが求められます。これが「リサーチ」・ペーパーと呼ばれる理由です。テーマについて有用な情報を集め、その上で自分の意見を組み立てるという作業——つまり文章を書き始める前の準備がいかにかんがわれているか、またそ

れを正しい形式で、有効に論文に反映させられているかが、評価の重要な対象となるのです。

ただしこの調査も、必ずしも一人で地の果てまで行って金脈を掘り当てるような、孤独で困難な作業である必要はありません。よほど重箱の隅をつつくようなりサーチでない限り、どんなトピックについても必ず「先行研究」というものがあります。つまり、その問題について他の人たちがすでに集めたデータや事実、そしてこれに基づいてその人たちが行った議論の総体のことです。トピックの選択過程そのものをリサーチの第一段階とすると、この既存研究の文献調査 (literature review) が第二段階にあたります。

リサーチの際の心構え——剽窃 (ひょうせつ) を避けるために

さて、論文を書き始めるにあたってどれだけ調査をしたのか、またどんな情報を見つけたのかを示すためには、当然その情報と情報源(ソース)を明記する必要があります。「当然」と書きましたが、実はこれこそ、初めて論文を書く学生にとって、いちばん危険な落とし穴なのです。オリジナルな発想や発明に特許が与えられるように、論文では他人の言葉や考えにも、いわばいちいち名札を貼っていく必要があることを理解するのが、最初の大きな一歩です。

小論文のような作文に慣れていると、「自分の頭で考えたこと」のほうが「他人がすでに言ったこと」よりずっと重要な気がするかもしれませんが。しかし、いわゆるアカデミック・ライティング(リサーチ・ペーパーはこれに当たります)では、どちらも同じくらい重要です。むしろ、調査はしっかりしてあるけれども議論がやや弱い論文と、調査もしないで自前の見解を強く主張している論文とでは、前者のほうが将来性があるとして、高く評価される可能性が高いでしょう。知識に裏打ちされない、その場の思いつきでしかない「意見」は求められていないのです。

論文においては、自分の言葉や考えと、他人のそれとの境界線をはっきりと示すことも、書き手の大事な義務です。これを怠ったり、あるいは故意にごまかしたりすると、剽窃行為 (plagiarism) と見なされます。たとえば英米の大学では、学生は剽窃が発覚した時点で、その授業の単位を落とすことは確実

であるばかりか、しばしば退学処分になります。それほど重大な違反行為と見なされているわけですが、日本の大学ではこれまで、カンニングは懲罰の対象であっても、剽窃は見過ごされることもありましたが、インターネットの普及でいわゆる「コピー・アンド・ペースト(コピペ)行為」が目立つようになり、問題が深刻化したために、これを罰することが通例となりました。同じレポートの二重提出も剽窃と同様の扱いとなります。

ただし、一口に剽窃と言っても、コピペのような故意で悪質な行為もあれば、書き手がアカデミック・ライティングに不慣れであり、そのルールを知らないために起こる、いわば無自覚の盗作行為もあります。逆に言えば、学生がルールを学びさえすれば、少なくとも一部の剽窃問題は解決するはずですが、この本では、文献の正しい引用方法を紹介していますので、参考にして下さい。

明確な「主題文 (Thesis Statement)」の重要性

それから最後にもう一つ、アカデミック・ライティングの重要なルールがあります。それは、自分の意見を述べる際には、曖昧にお茶を濁すことなく、はっきりした主張を述べる必要があるということです。これもまた、日本の学生にはあまりなじみがないことなので、論文を書くときの目に見えない障害となりがちですが、慣れてしまえば、この態度を身につけた方が論文を書きやすいということに気づくはずですが。

論文では、イントロダクション(序論)の部分で、議論の根幹となる主張をコンパクトにまとめて述べる、いわゆる主題文(thesis statement)を打ち出すのが普通です。主題文の形態は、論文の内容によって異なりますが、たとえば死刑制度の是非といった、いわゆる controversial な(賛否両論に分かれて激しい議論が交わされるような)トピックの場合、初めの方に「○○という理由から、Aは是である(あるいは非である)」という主題文を示しておけば、話が分かりやすくなるでしょう。(ちなみに、「私はAが是(非)であると思う」とあえて言う必要はありません。あなたの論文である以上、そこに書かれるのがあなたの意見であることは自明だからです。)

しかし、たとえば日本の裁判員制度と米国の陪審制度を比較するような場合、日本の学生は「AとBを比較検討し、その違いについて考察する」といった主題文を書きがちですが、実はそこには主張と言えるものが入っていません。たとえば「AとBを比較検討すると、実は〇〇という違いがあることが明らかになり、それが××という結果を生んでいることが分かる」というように、少なくとも書き手の独自の着眼に基づいたリサーチとその結果を示すものでなければ、主題文とは言えません。また、論文の中で自分の主張への反対意見を紹介することは重要ですが、単に「〇〇ではなく、××だという意見もないではない」とか、「反対意見も考慮に入れる必要はあるだろう」と譲歩して終わるのではなく、そうした反論をきちんと検証し、それが自分の主張を覆すほどの力を持たないことを証明する努力をしなければなりません。最初から妥協的な態度を取るようでは、そもそも論文を書く意味がありません。

確かに、特に日本の社会では、いちいち強い意見を主張する人は、けむたがられる傾向があります。またディスカッションをしても、話を丸く納めることを目指すあまり、無難な結論にすぐ落ち着いてしまうか、あるいは議論の内容よりも発言者の語気にみんなが反応して、険悪なムードになりがちです。実際のところ、日常生活のなかでは、そう簡単に黒白つけられない問題のほうが多いに決まっています。けれどもアカデミック・ライティングにおいては、まずは自分の立場をはっきりさせ、そこから議論をスタートさせるという決まりがあります。そうして他の人と（紙の上で）意見を戦わせることで、より洗練され、高度な議論が生まれるという発想なのです。これはあくまで、学術的な論議という特殊なゲームのルールだと考えるといいでしょう。たとえばアメリカでは、子供の頃から学校の授業でディスカッションを頻繁に行うので、ある意味ではアカデミック・ライティングの素地が早くから作られているとも言えます。とはいえ本格的なリサーチの仕方、レポートの文体や内容についてのルールを学ぶのは、やはり大学に入ってからなので、その点ではアメリカの学生でも同じ苦勞をするわけです。

まとめ——リサーチ力と思考力

これまで書いてきたことをまとめると、リサーチ・ペーパーで評価される二つの大きな要素は、リサーチ力と思考力です。

リサーチ力とは、実りのありそうな、かつ大き過ぎないトピックをいかに選べるか、そして信頼できる情報源をいかに探し出せるかに関わります。だから、無精をしてトピックをいい加減に選んでしまうと、良い文献が見つからず、あとでかえって骨が折れることになります。このため、トピック選びの際に、第一段階のリサーチをしっかりとしておくべきです。

また思考力は、そうして集めた事実やデータ、そしてトピックに関する既存の議論を比べつつ分析し、その上で自分なりの意見を組み立てていくのに必要です。小論文で求められる瞬発的な思考力、あるいは記憶力ではなく、調査力と辛抱強い思考力が、リサーチ・ペーパーではものを言うのです。

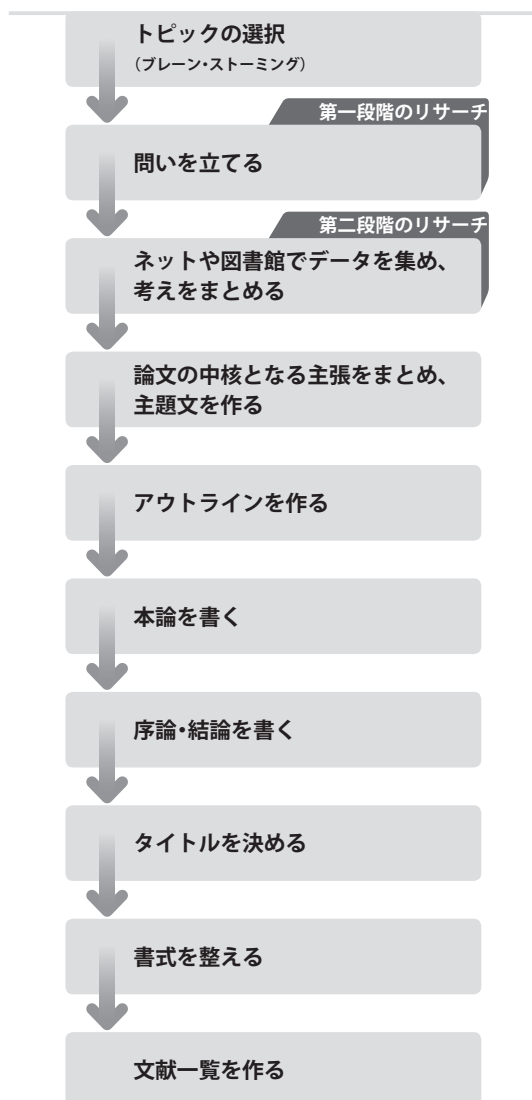
この本の構成と使い方

この本は、基本的には英語アカデミック・ライティングの初心者を中心に置いて、リサーチ・ペーパーのトピックの選び方、リサーチの仕方、主題文の作り方、アウトラインの書き方、原稿の構成の仕方と適切な表現、書式の整え方、そして引用の仕方の基礎を紹介しています。ただし、引用方法の詳しい用例については、とてもここでは扱いきれないので、この本の終わりの「参考文献」に載せた英語論文のルールブックを参照して下さい。

最後に付録として、論文および引用文献リストのサンプルが載っていますので、参考にして下さい。

1.1 リサーチ・ペーパー作成の流れ

リサーチ・ペーパー執筆の作業は、大まかに図のような流れになります。



1.2 トピックの選び方

論文では、大きく分けて、あらかじめ特定のトピックを与えられる場合と、学生が自分の関心に合ったトピックを選択する場合があります。前者の場合、かなり具体的にトピックが決められることもあれば、大まかな方向性や範囲を指示されたり、複数の選択肢が与えられることもあります。後者の場合、学生が好きなトピックを選ぶとはいっても、「私の好きなマンガ」について書いてもいいということではなく（そういうテーマの授業なら別ですが）、たいていは何らかの形で授業の内容を反映させることが期待されます。

最終的にどのようなトピックを選ぶにしても、十分なリサーチを行い、データを吟味した上で、自分の考えを整理し、論理的に議論を組み立てることが目標となります。単にデータを集めて順に並べるだけではなく、自分の意見をはっきりと述べることが求められます。

トピック選びは一見簡単なので、深く考えずにその場の思いつきで決めてしまう人が多いのですが、そうすると後で泣くはめになります。どうせ長い時間と労力をかけて論文を書くのですから、その作業から役立つ知識や価値ある意見を身につけられるよう、この時点でしっかりビジョンを持って、論文の方向性を考え始めましょう。トピックを選ぶ際には、論文の長さ（単語数）や執筆に与えられた時間、想定される読者のレベルなどを考慮して、どれくらいのスケールの論文を求められているのかを見極めることが大事です。当然ながら、リサーチの必要もないほど単純な問題に取り組んでも意味がありませんが、かと言ってあまりに巨大なトピックに挑戦しても、膨大なデータを前に戸惑ってしまうでしょう。英語には“Don't bite off more than you can chew.”（手に負えないほどの仕事を抱えこむな）という表現がありますが、これはリサーチ・トピックを選ぶ際には良い教訓です。

ここからは、初めて文系の英語論文を書く人のために、トピックを探す手順を簡単に紹介します。まずは以下の手順を読んでから、11~12ページの「トピック選択シート」を使って、トピックを決めましょう。もう決まっているという人も、念のため各Stepには目を通して下さい。

1.3 トピック選択シートを使って、トピックを決める

ここでは、リサーチのきっかけとなる問いを立て、これを具体化していくという方法でトピックを探します。

Step 1 | ブレーン・ストーミング——頭からキーワードを引き出す

ブレーン・ストーミングとは、直訳すると「脳に嵐を起こすこと」ですが、つまりは頭をひねって、中のアイデアを自由に、芋づる式に引き出していくということです。この時点ではアイデアを文章化する必要はなく、キーワードだけを書くか、箇条書きにします。(英語の論文ですから、理想的にはここから英語を使いたいところですが、それではうまく連想ができないという人は、とりあえず日本語でもいいでしょう。)

すでにトピックが与えられている場合は、それをにらみながら、連想されるキーワードを書きつけていきます。自分でトピックを選ぶ場合は、まず一つ、自分にとって面白そうなキーワードを選びます。たとえば「環境問題」、「コミュニケーション」、「グローバル化」など、漠然としたものでも構いません。そして、そこから連想されるキーワードを書き出していきましょう。たとえば「コミュニケーション」からは「インターネット」や「SNS (Social Network Services)」や「高齢化社会」、「環境問題」からは「捕鯨反対運動」や「地球温暖化」や「エコビジネス」などが出てくるかもしれません。

このキーワード群は、最初は雑多なアイデアの羅列に見えるかもしれませんが、よく見れば何らかのパターンや共通のテーマが浮かび上がってくるものなので、そこから中心となるアイデアをいくつか抽出していきましょう。ここでの目的は、自分の関心の大きな輪郭をあぶり出すことです。

Step 2 | キーワードから問いを立て、焦点を絞る

次に、Step 1 で選んだキーワード群から好きなものを選んで、問いを立ててみます。この時点では、問いの具体性はさまざまですが、ま

ずは大ざっぱなものでも構いません。たとえば「コミュニケーション」と「インターネット」を組み合わせ、「インターネットは人と人とのコミュニケーションをどのように変えてきたか?」という問いを思いつくかもしれません。あるいは「地球温暖化」と「環境ビジネス」がキーワードなら、「地球温暖化対策で誰がいちばん利益を得たのか?」でもいいでしょう。

Step 3 | 問いを具体化するため、インターネットでキーワード検索を行い、自分の関心対象を探る

さて、「インターネットは人と人とのコミュニケーションにどう影響しているか?」、または「地球温暖化対策で、誰がいちばん利益を得たのか?」といった問いは、そのままではリサーチ・ペーパーのトピックにはなりません。あまりに大きく、漠然としているからです。ここでもう一步踏み込んで、指定された論文の長さや、求められている専門性の度合いを考えながら、問いの対象範囲を限定する必要があります。

問いの焦点を定める方法はいくつもありますが、簡単なのは、所定のテーマについて、特定の場所、時期、集団に話を特化したり、テーマの一側面だけに注目することです。

Step 1 のキーワードを見直してみましょう。たとえば「インターネットは人と人とのコミュニケーションをどう変えたか?」という問いについては、インターネットのユーザー全般を念頭に置くのではなく、「21世紀の日本のティーンエイジャー」に注目することもできますし、インターネットの機能のなかでも Facebook や Twitter などの SNS を使用している人に焦点を当てることもできます。「地球温暖化対策で、誰がいちばん利益を得たのか?」であれば、たとえば日本のエコカー産業を話の中心に据えたり、京都議定書に話を絞ることもできるでしょう。

この時点で、特に自分の関心がどういった問題に絞られるのかを探るため、Google などのインターネット検索エンジンで、選んだキーワードをサーチにかけて、どんなトピックがヒットするかを見てみましょう。そして、そこからどのような問いを立てられるかを考えてみて下さい。

Step 4 | 最終的な問いを立て、リサーチを始める

Step 3 で得た情報をもとに、Step 2 の問いを具体化します。最初から答えが見えているような問いを立てず、自分が本当に知りたいと思うことを問いにしていきましょう。たとえば、「どの SNS が日本の若者に最も人気で、その理由は何か?」とか、「地球温暖化の危険性は、なぜ、誰によって、誇大に訴えられてきたのか?」という具体的な疑問を持ったとしたら、これに対する自分なりの答えを見つけるべく、既存の議論やデータを調べていくことになります。この第二段階のリサーチを literature review (文献調査) と呼びます。